

講義録

横浜市立大学学術情報センター市民講座『地域通貨の可能性～”ひと”と”まち”の再発見～』

第一回 平成 14 年 11 月 7 日

「エンデの遺言から始まった」

講師：河邑厚德先生 NHK放送総局エグゼクティブ・プロデューサー

第1章 死の問題から始まった

最初に、末期がん患者への取材を通して「病院で死ぬ」ということはどういうことなのかを見つめた NHK 番組「がん宣告」、死を前提とする独特の輪廻転生の思想・文化を持つ地域を取材した番組「シルクロード」「チベット死者の書」のビデオが上映された。

- ・がん患者の取材を通して、死は誰にでも訪れ、科学技術では解決できない問題であることを実感する。 物質文明の限界
- ・チベットへの取材で、生命は有限であることを前提とし、環境倫理を取り入れた文化に接する。 循環的で持続可能な社会
- ・インドでの取材で、現代を支配する「科学の知」ではない、「神話の知」（“私”の存在を現象と関わらせながら見る真実、自分にとっての真実）に触れる 死の問題への解決の糸口の発見

第2章 エンデとの出会い

- ・他番組（NHK スペシャル：アインシュタイン・ロマン）へキャスターとして、作家ミヒャエル・エンデに出演依頼をしたことが出会いであった。
- ・エンデは著作『モモ』で時間をテーマとして、科学技術や経済システムに基盤を置く現代文明を批判した。『モモ』の中で時間貯蓄銀行の灰色の男達は、人の時間を盗み、不労所得や投資などの利潤を生み出している。 お金にも倫理問題は存在する。
- ・エンデの自然科学批判はお金の問題に繋がっている。現代が抱える資本主義経済システムの根源的欠陥を、エンデは「お金」を根源的に問い直すことで気付かせようとした。
- ・エンデの遺言のコンセプトは「地球に生命を生み出し持続させている生態系システムと衝突する経済システムこそが問題の根源である」

お金には 2 種類ある：お金（パンを買うお金）と資本（お金自体が商品として扱われ、利子や投資による利潤を生み出す）は違う。実際のものは時間とともに消費され消滅するが、お金だけが不滅で、逆に利子がついて増殖する。 お金に現代社会の様々な問題の根がある。（ミヒャエル・エンデの言葉より）

第3章 地域通貨の思想

- ・エンデは「老化するお金」を評価していた。(オーストリア・ヴェルグルで実際に毎月1%づつ価値を減じる地域通貨が使われた例がある。所有していても価値は減っていくという特徴をもつこの通貨は町中を循環し始め、新たな商業活動を活発にした。この通貨の提唱者で経済学者のシルビオ・ゲゼルは、ちょうど血液が体内を循環した後老化して排泄されるように、お金も経済プロセスの終わりには消滅すべきだと考えていた。それが老化するお金、「スタンプ通貨」である。)
- ・地域通貨の意義とは：
 - 利子を生まない 有限な自然という存在に対応する
 - 資本にならない 貯めこまれず循環する
 - モノとして商品化できない 利潤を求めて暴走しない
 - 地域性 コミュニティーを育て相互扶助を促し、地域内を循環
 - 地域通貨は環境・伝統の価値を体現化できる可能性を持つ

第4章 経済学そのものを疑う

- ・アダム・スミスに始まる古典経済学は18世紀生まれた。世界は無限であると考えられ、人口は急成長し人間は物質的豊かさを追求した時代である。
 - 経済学の前提 自己愛の肯定・自己利益の追求が公共の利益につながる(見えざる手) 他者への慈悲や寛容は経済行為の徳目でない。
 - 経済学では自然資源 = 外部不経済と捉えられる。そのため長期的利潤ではなく短期的経済利潤を求めて自然が破壊されている。
 - 経済システム自体が子孫から未来を奪う非倫理的なものである。
- ・「狭義の経済学」(生産と消費だけを計数化しながら商品経済や市場経済を対象とする学問)から「広義の経済学」(あらたに自然や生態系を関連させて、つまり広義の物質代謝の過程としてとらえなおす学問)への転換が今求められている。
 - Ex. レスター・ブラウン「エコ・エコノミー」(エコロジーとエコノミーの調和を提言)

(STAFF: 金子 友美 久原 晃子)

